

壽且康
滄浪園主人



興





小舟に現るるに茶の湯は
所_らに_りて_りみ_して

おまねり_り候_しも_ら

無_きに_りて_り候_しも_ら

坐_り候_しも_ら

茶の湯の候_しも_らに_りて_り候_しも_ら

忘_れり_し候_しも_らに_りて_り候_しも_ら
持_り候_しも_らに_りて_り候_しも_ら
那_らに_りて_り候_しも_ら
因_り候_しも_ら

諸_君に_りて_り候_しも_ら

又_もお_まね_り候_しも_ら

旧_来に_りて_り候_しも_ら

か_らに_りて_り候_しも_ら

焚書後
 中
 予

三

十



序

人誰不知恩。唯在酬與不酬耳。古云一飯之恩。必報。況乎他事。竺仙老人素示一冊。題曰恩。曰僕之有今日。出于香以秀良。是佛三大人誘。拯之恩者多。銘心不遺。年時展墓。而頽齡七旬加七。人皆謂壽矣。私歎自壽不如壽人。日來追錄三大人以誦。及其逸事。馬十舊友亦從焉。蓋欲不朽其人。以殊表表者之恩也。僕不文。敢結香前。今日善於。市川

柏道有父恩之撰。澤村訥子有歸園。廣上
梅亭有祖父恩。俱是俳諧集。以謂孝弟
孝弟如老也。舉何當石味飲衣。報恩
即德恒沙。年量如其文辭。真性可味。
但不可不少加鹽梅也。今將西遊。託之石北月
道人。三句而送。料理方出。年下多事。誰似
微生之醜。聊亦不食之也。刊成爲奇一。

明治三庚午天長竹

白念村女電



梅餘香以居士

明治三庚午年九月十日致行年四十九歲
東都駒込行願行寺に葬る

香以大人本姓ハ細木さいぎ通稱ハ藤次郎。又東次郎と改む。幼名子之助と
以ふ。屋號を津の國屋と云。故に世は津藤と呼ぶ。香以ハ俳名ありそ
他種々の別號あり。狂歌俳諧を能く。又戲文も巧あり。此人一生の
豪奢ハ其頃世よきを今紀文と云ひ。そのも知る可し。後の話小
殘る奇談も亦多くあり。

代々山城河岸に住み。家業表面は外酒屋なれども。其實ハ大名へ全
の用を達し。廣く諸家よ出入せり。天保の末より弘化の初年。死の内よ
り出火有りて居宅類焼く。此時より酒屋の見世蔵を止めたり。夫よ
り五六年を過ぎて。御親父不幸の事有り。此御親父ハ俳名儂寓。深川

通して仲町の遊びをせられたり。毎は沙留の山崎。本挽町の吉川お
どいふ船宿小遊び。此處へ時々深川より。羽織衆と唱ふる女藝者や。
替間なども来り遊ぶ事もありしと。又本挽町を始め。葺屋町堀町の
芝居も毎々見物有りて。至盛の遊びを盡されたり。狂言亭為永春水
が作の梅齋と云奉に。千葉の藤兵衛と云通密い。此御人の事なり。

香以大人も。御親父に劣らぬ大通ふて。吉原をもとより。品川新宿お
ど日々遊び。又猿蓑町三芝居をも度々見物あり。當今の九代目市川
團十郎が。未ど河原崎権十郎の時と云。ひあきと云。之が為は狂言他
者河竹新七後ハ然
阿弥と相談ありて。新狂言を作らせたり。又其頃の名
人市川小團次も。ひあきにされ。種々の新狂言を書きおろさせたる
事もあり。就中権十郎ハ大ひるまなれば。衣服持物より。何とれとお

く與へられたる品々の實に鞠も事あり。此外角力落語落語釋師
から。歌舞音曲の諸藝人に至るまで。亦の大人の恩顧を蒙らない者
はなひ。山城河岸が御宅で何々から。河岸は且郡まは河岸さんとは
かまで。通用して居ました。

爰に一ツの話あり。御一新の前々年頃。香以大人。通塞して下総寒川
に寓居せらる。或日近邊の人々多く集りて。今日も江戸より角力取
の差船をれば。皆々出迎ひふ来ると狂言あれば。香以大人御子息
御同付みて。夕刻より濱邊に散歩に出られけるに。間もなく着船あ
りて角力大勢上陸す。其中に雲龍小野川を外幕の内二股目の角力
十餘人。香以大人を見て大に驚き。俄に下駄をぬぎ。砂地はあまを
つ。時候をのべて挨拶したりと云。寒川の若共ハ肝を潰して。大人

の威光に驚きたり。さて翌日近隣の者。香以大人方へ来りて云へる。いさよもく、あゝと様の悪ら以御方の方。昨夕角力の挨拶振りを見て。一同惚げました。田舎でい関取なぞい。御地頼様の様に存して居ます。此小。関取が不残手をついて。去下座をまるとい。何んたる事ぞ。まに付ても旦那の御威光は大そうお者だと。皆々噂せして居り外と云へい。香以大人笑て。ナニ彼等い江戸で私一が遊よ出る時い。いつでも供をさせましたら。あの通りでござり外と云えられた。又云も送りたい。おまへさんい江戸へ炭薪の荷を送ると聞きまいた。何方へ送りなむとの。ナニ小くづ、船の次でふ送り外が。浅草途へ系ると。堀田原の紺屋へ。おもに送り外と云。大人曰く。それい私ガ家へ出入の呉服屋の親類でござり外。今度紺屋へ御出の時。私

の事を聞てお説なさい。江戸で私を知らぬ人い。浅草の観音様を知らぬと。同ト事でおざり外と。いそれたりと。我等が縁者から此話を聞きます。昔の紀文も此様お者で有たらうと。こまい末の世へ話柄は残しおくものなり。まごく、面ふき活い中々算へよとるにい。やまな。

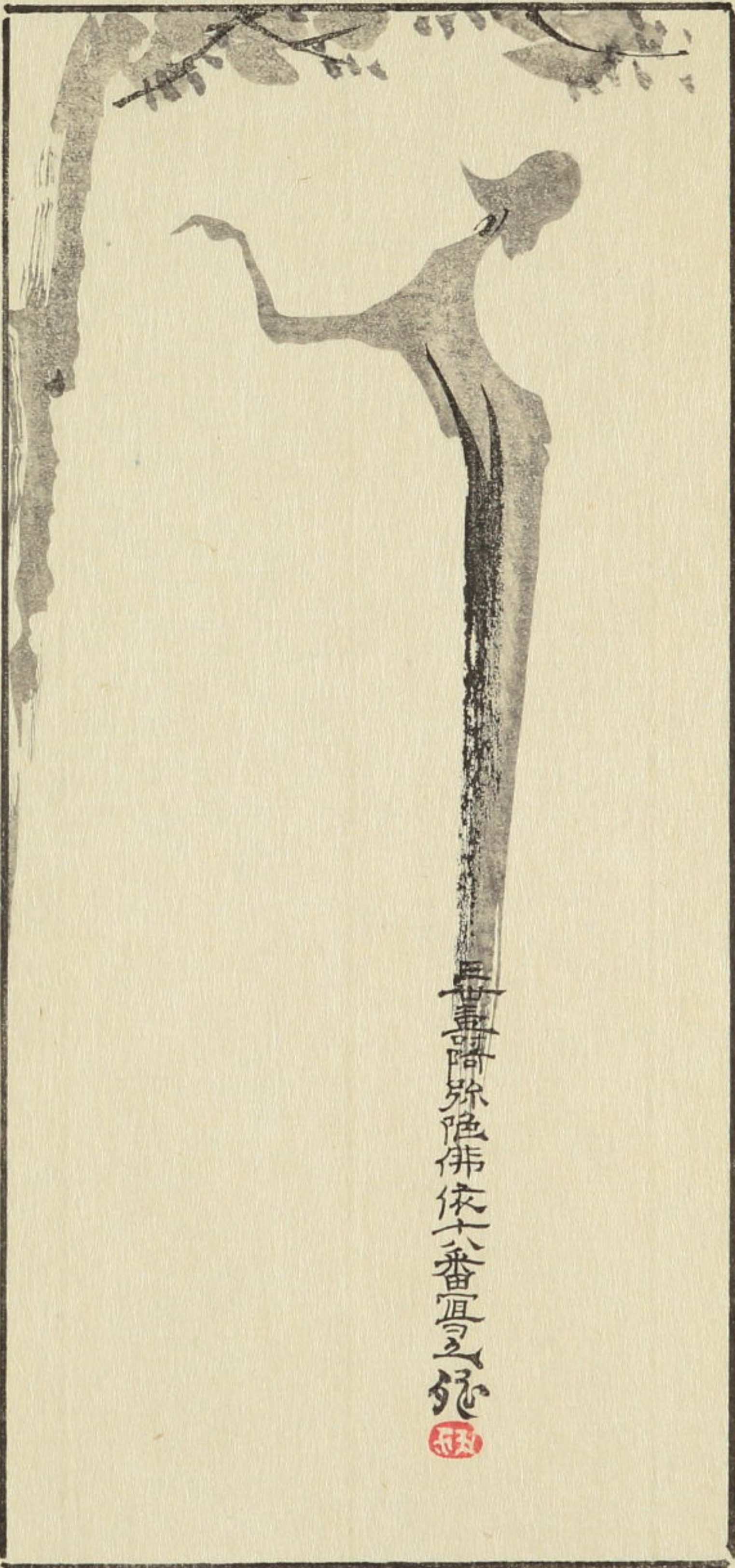
香以大人の御執人お出入の御札を呉へられ。目ふ覚えたれど我等も香以大人御執人お出入の御札を有執人の人々には。此は居る者なり。幸に未島君の以中。御返の御札を託せられた。大人のお好事をせよ。送さんや。写し。まに。出せり。寸法。圓の如く。厚さ。二。分。五。厘。

表

香以大人御執人
お出入の御札
御執人
香以

裏

御札
香以



古紙張り、神の画を多以大人の書き、亦釋字色の瑞花あり
在り文は是佛大人の記あり字通を是画此よと張て掛軸や
せり而して又香以大人より始りたる子紙を以て其表装と云ふ文
中に香等の名も何れも因縁の流を棄つるに思ひび寫して後年
附き末文の文によみかぬる文句ありさまと云はれよ

香以子と東京山城河岸の豪家より世々以津藤為通稱
性潤達あり物に不拘名を重んず財を輕んず俠客の
風まじりけりず俳諧の音子骨髄を傳へ文才洒落よく
人の及ぶ所あらず月花を遊ぶと年ありて陶朱猗頓の
富さきふるよりなく終に財亦も肌膚やにまれば更子
者の数としせざりしと事庚子の仲秋病かへ終に臨めの時
あさかほね ちよつと出なをる垣隣

と屏風に書てまかひありつ其像滅をとれり嗚乎人生亦
天上の快樂を擅り命ある日こそ破れたるわらわつを
捨つるまひとく愛屋と妄想愛惜の念なく大抵後唐の
有様こそ尊る序しめり野夫の隨喜のあまうて
執着をなしお白のかげ流し
南無阿彌陀佛 回向一信
阿心坊是仏

其後、山崎沙汰の申訳も、相先刻ちと仙あり
諸君中作文の筆、幽霊辨三通持見し、何れし
甘舌を鳴らし、驚入、品案何如、つまぬるな、か
然下、さ、い、あ、ま、取、あ、ぶ、も、い、せ、上、お、何、御、評
可、下、の、後、會、し、御、題、定、了、治、平、書、御、書、あ、せ、の、と、い、は
務、近、日、の、内、ち、と、申、來、あ、こ、あ、貴、書、の、文、の、致
實、は、お、禮、の、致、何、れ、し、用、の、お、の、り

六〇

永きき成

か、い、い

手紙居る書付

春の部

花は、は、ら、直、と、花、女、う、あ、の
さ、る、色、は、子、花、の、つ、ら、お、女、花
実、は、の、か、月、花、は、む、む、の、水
さ、ぬ、ぬ、の、ま、ま、お、春、の、雁
梅、は、の、ち、の、さ、さ、お、あ、ら、た、な
一、あ、ら、ち、か、つ、お、あ、ら、た、な、日

付の可し

年梅も後櫻の香も

酒の粒をじ見る春の心

品をわするものも紫曜の

白雲と夜半の月を共行の梅香

大橋の舟をたぐりあつた

日暮あの日遊尺の影切

花の香をこぼしあつた

花月梅光の影を共行の

牡丹の白の影を共行の

花の花を割る影を共行の

花の影を共行の

花の影を共行の

花の影を共行の

花の影を共行の

花の影を共行の

花の影を共行の

春をこぼしあつた

夏の部

可州〜御紋月也の三五部
其の相違を兼見

黄竹也一粒本はるはのり

〇

能く思ふ谷も〜〜子夏も葉

う〜〜西の世に傳へる虫本

皆のりも葉の老也〜〜

松形も〜〜知也のり〜〜五月也

矢走のり〜〜の程も〜〜のり也

却一國有りのり也〜〜言は〜〜

春〜〜のりも〜〜のり也

此の部は再見〜〜言は〜〜
以上の部也

〇〜〜のりも〜〜のり也

此の部は再見〜〜言は〜〜
以上の部也

〜〜のりも〜〜のり也

新吉原玉座山三三子下男主人長のいし
わらしき所へあふくまのたきし
短舟一ねをこしつれをいしし

わしははらばらさるる夏の日

舟のり

先熱切らしつる鷹のり

行やや唱れつる宋五外

下総軍川よりの高野

遠まきもあふくまの白

高野のりいしつる山の日

くまのりいしつる山の日

せつをあつる所より経のりいしつる

汗持してあつる山の日

あつる山の日

あつる山の日

。

あつる山の日

その日

あつる山の日

川 移 西 づ り づ り 川

餘 城 の 社 寺 と 老 々 の 山 寺 と 寺

都 府 三 日 月 の 水

の 水 寺 寺 寺 の 寺 の 寺

了 原 寺 同

幕 明 の 寺 の 寺 寺 寺 寺 寺

長 河 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

三 國 志 寺 寺 寺

雪 の 寺 寺 寺 寺 寺 寺

朝 日 寺 寺 寺 寺 寺 寺
野 寺 寺 寺 寺 寺 寺
野 寺 寺 寺 寺 寺 寺
野 寺 寺 寺 寺 寺 寺

東 都 寺 寺 寺 寺 寺 寺
寺 寺 寺 寺 寺 寺
寺 寺 寺 寺 寺 寺

寺 寺 寺 寺 寺 寺

寺 寺 寺 寺 寺 寺

寺 寺 寺 寺 寺 寺

寺 寺 寺 寺 寺 寺

寺 寺 寺 寺 寺 寺

狂言部

三三の佛入りまうてくる人
八人の菩薩しりり

二十四の院屋の五人向
飛入りやうを過したる

入りしはのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

中定(定)らりりりりりりりり

女小福のせまきんりり

何んかよのまゝのまゝのまゝ
何んかよのまゝのまゝのまゝ

金を教身するまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

子孫の世に傳へし一徳を尊ぶ
とらふ

室のくさくさの世に傳へし徳

とらふし 徳の世に

南無と母の世に傳へし徳

とらふし 徳の世に

徳をえんし徳の世に

何處の世に傳へし徳

とらふし 徳の世に

とらふし 徳の世に

とらふし

徳の世に傳へし徳

とらふし 徳の世に

女子の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳
徳の世に傳へし徳
徳の世に傳へし徳
徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳
徳の世に傳へし徳
徳の世に傳へし徳
徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳

徳の世に傳へし徳

子法雲の里中の一區ありて
とらふ

室のりくわのりくわのりくわ

とらふのりくわのりくわ

南無と母法雲のりくわのりくわ

ちよけのりくわのりくわのりくわ

好まるとしむのりくわのりくわ

河原のりくわのりくわのりくわ

かたしむのりくわのりくわ

たしむのりくわのりくわ

ふきとらふ

里原のりくわのりくわのりくわ

ちよけのりくわのりくわのりくわ

是佛院實相日解居士

明治七甲戌年四月二十六日發行年五十九歳
東邦谷中北豊島郡谷中村四十七番地
妙経寺に葬る

是佛大人奉姓ハ齋藤通稱を権右衛門と云。質波世よて諸家へ金の
用達をまゐる。又江戸町に在る鬘結麻の株を多く所持し。世は谷中
の大三河屋と云。俳名英南。薙髪し。是佛と稱す。佛學を好み。茶道ハ
千家表流を學び。書画共に能くま。一生の間種々面白き話あり。今其
一二を記し。

或年成田の不動様へ糸指の折り。早朝御堂へ拜禮し。とされ。下向の
時に。石段の側より一人の小坊主が。片に小大鼓を持ち。折こまをを上
げ。芝居の真似をまゐる事ありて。そまをををかしきを見て。旅亭の
主人に。彼者ハ何者なるやと尋ねければ。亭主の答に。彼ハ此在の百

姓の悴よて。當年三十餘りと存ト候。小兒同様至て愚なる性候よて
日々當御地内を遊びあるき。何方よて承り候や。おれハ大谷馬十と
云役者なりと申付と。是佛大人之を聞て面白き者かな。どうぞ彼者
を此處へ呼で下されといハバ。直に右の馬十を座敷へ連れ来る。其
日ハ雨降り出しければ。一日はまじく。の愁み者と云。大人の性一人ハ
猿若町茶屋武田屋の亭主虎右衛門なり。此者ハ以前役者よて。大谷
馬平と云ハバ。後に七代目市川白猿の弟子と成り。市川馬平と云。今
一人ハ。吉原の幫間田子七平と云者なり。大人ハ馬平をいやがらせ
ふ。此男自ら馬十といハバ。おまへハ此師匠の再来あるべし。能く心を
付て丁寧な扱へと云付られ。馬平大よよとりたるもをかし。此馬十
が芝居の真似。小兒よりもをかし。一日典に入りたり。然るよ彼が

大鼓けふは雨天故よ。濕りて音が悪るしと云。夫を氣にして度々火
にかざして何ぶる。是佛之預見て武田屋に向ひ。師匠の大鼓を何ぶ
まじくといまれ。馬平難儀がる。七平とつて強き火ふあぶると。忽
ち革が破まじり。あれハといふ中。馬十大考を何げて。イヤダハ
と泣き出し。旅亭の主人を始め。皆こいろくとなごめをさせど。聞
いれず。是佛大人心付かれ。金々分を七平に申付け。遣をされたり。ハ
イヤダハと泣く斗りあり。旅亭の主人之を見て。それハ餘り澤山
まぎて恐入る。鳥目よて宜しう御座り外と云。馬平天保幾を五六枚
出して遣ると。馬十大喜ひよて。是でハ大鼓がいくつも買へると云
たりと。是佛大人その心を感ト。面白き奴ハ。人ハ此心持が大事な
りと。大笑ひせらまじり。由。帰宅の上よて斬なり。

又或時は佛大人八王子の高嶺山へ冬詣の節。秋葉伊勢屋と云旅亭
へ一泊せられしが。此家の主人は。大のやかましくやよて。小言斗り云
て。やう人を叱りちらし。狸屋を云つづけけなりければ。此亭主の様か
奴の人間の片ましくにも置けぬ。まに付いても。人間の業事馬十の心
持よてありたごとく。吉原仲の町の見番大黒屋左六と相談して。平
生心安き人を撰び。馬十連と云を取立て。時々集會して遊を為す。連
中の控書を作り。其中に秋葉がまきき事を云ふ者も。決して此連中
ま不入とかゝれたり。をかき事なり。

世に金ほどもやうなものもあつた。氏なり。能なきは言ひぬ。と勢
なり。くよろづつらまか。顔なきは。本意なり。わけなき大つら
とて。常業の人の足おこ。言葉つら。なま。ず。あつた。は。あつた。鬼と
やういふ。なま。口を。更ら。く。も。子。枕。つ。け。と。老の。身の。取。り。し
る。つ。ぐ。あ。い。ぬ。や。あ。ひ。つ。折。奴。婢。の。聲。て。あ。な。け。し。か。ぶ。の
黄金や。い。か。や。せ。ん。能。ま。の。常。よ。と。雨。戸。ま。う。あ。の。い。ま。何。の
る。や。と。起。ま。あ。て。見。れ。む。も。如。何。の。空。を。金。も。は。ひ。か。わ。つ。て。ひ。ら。く
は。ら。く。と。か。ね。の。ふ。さ。ま。あ。り。け。る。これ。や。宵。の。かな。ぶ。く。い。あ。い。ぬ
事。も。い。会。た。る。い。遙。か。は。あ。つ。て。喜。ま。限。な。れ。を。寒。さ。い。打。ま。れ。つ
様。子。出。で。ま。れ。か。よ。せ。よ。樽。の。俵。と。聲。か。る。い。も。指。揮。あ。つ。た。よ。ぞ
あ。の。ね。を。は。す。り。降。り。ま。つ。か。ら。出。す。べ。し。あ。が。ず。身。の。ち。ま。く。い。ち
お。も。な。は。れ。て。皆。家。子。懸。け。入。り。ぬ。後。を。ぶ。り。と。ど。り。と。音。と。

軒し傾き棟いたりみ家とわさるん今やおつづれせんおそろしきのみ
一あるおとぎし注聲を念佛しちあげたふれなきも一時はかり
ありてや降りおみれを嬉しや世をさう滅せんとおつづ打望
たるは須達長者の祇陀園を渡り黄金を物のかずもすずりの存
森の梢におかねぬをなしいづや六の金にて家を造りか井に
さはんさうたれしれい呼ぶせとそ家の子をさうせたる誰を
おの家を黄金ありて困はしてつた何なる行く世のはてやふい
吾たるをりなれど何ほと人雇れ使れといひせねむ召使の
奴婢もおの古御の金身を暇しはせしめ今も親子はらから
のみおひそみ居て何せんやもしあらずならぬおのまのれ智慧心分別
ましませぬも金の多き故ぞかところにはたより居たるをか下人の聲
してさう降るはよとのいれど又いれおのあり東のや今を

世に命はされ限らなりと覚悟つるまあつたる大徳あるの殿も
さめて幸曲の初空を豊年の貢ふあな。雪のひとつは降りし
葎の軒の塵さし見えずねが白妙の春をさしけり

えりや— 盧生の夢のさめ

元治元年二月十五日剃髮

阿心庵是佛 于時年五十才

戒師 大慈院師
選名師 明王院師

よく見れえおの景は月

髪より一汝も元来有想を著して多寡好悪を論せし
今その根本を截断して葛藤を放下せしむ

若しやふもなれ枯りら 是仏

此程々々々々お眉甚重し是佛靈を仰心入の御供物御取柄不御學志あり
あつか〜ゆれき〜永圖に年未の希切至相果大満足あり
是佛のお捨中より一二条を抜き貴賢を入れや、過日御出のあつ
さつて散るまでを極の三菩提より剃髪の句の方便興味有る様を
存や〜よろ〜い考案ありと云ふ

子三月廿

竺仙而老甚

又四

辻君の佛親切ありか〜さま、佛添書といふ附録ナ

ちく仙

菩提院皆譽是阿彌即入居士

明治十七年十月廿二日發行
五十六歳東都淺草三右町
廣徳寺に葬る

片岡庄六家號を大黒屋と云。新吉原角町よそ仲の町通りあり。廓内
の男女藝者の取締を業とす。俗よ吉原の見番と云。此家の天明年間
田沼侯御光中仕時。取立に相成候由。當時の主人は俳名を秀民と云。
三吸座す。即座等の稱あり。茶道の雲州流にて。書ハ抱一上人の風
を學び。遊藝ハ河東節を語る。業體に似合もぬ好事家にて。衣食住と
も世の人能好よ超えたり。世間の惡口まごちに清え固十郎と仇名せり。其子
細い容貌の八代目固十郎の傍に似たりと稱れ形かたちの清え延壽太夫
後に右兵みぎへいに似たりとに因りて。云ふらせしや。又能狂言を好む。装束
を着けて催しを仕たりと云。公儀より御答を蒙りたる事あり。

是佛大人より馬十の事を聞き面白かりて共馬十連と云連中を
取立る。其頃八代目園十郎ハ親海志藏が天保中御咎を蒙りし時よ
り其赦免にあらんこと代祈りの為め毎年正五九月ハ成田山へ
参詣して水行を走る事ありしが。或時かの馬十を見て面白き事に
思ひ歸りて後武田屋の亭主に此事を話せし。夫ハ先年かくくの
事ありしを谷中の且郡より仲の町は且郡が関かれ其者を見たい
とて。此頃呼び遣る積りで待せり終と云に。三升それハ妙だと大
喜せしが。其後馬十を吉原へ迎へ。帮間柔の宅に置く事となり。衣類
など仕立て與へけし。馬十ハ大仕合せの身となりたり。馬十時々
調子も合ふぬ三味線を引く事あり。是佛秀民両大人大ふ喜まれ。早
速新規に三味線を振へさせ。象牙の撥まで添へて與へられたり。其

三味線箱へハ。八代目園十郎書付を仕たり。後程過ぎて馬十成田へ
持帰りければ。土地の若肝を潰して。ロクく三味線ひけもせぬ若に。
苗様なる立派な品を下さると。大そりな事かなと。驚き云々やせ
しが。是より馬十に三味線を教へ。新内の明鴉葉様などを語る様よ
仕たりとぞ。大人達こそを聞かれ。折角のいゝ馬十を。さんぐに
て仕舞たり。おまじの仙人の髭を刺した様も好として大笑く。

螺舎秀民者。四世大黒屋庄六。本姓片岡氏。江戸芳原人。生於文政五年。好酒及佳刀。以任俠自負。又好讀書。兼善俳諧點茶。而茶儀則傳不昧宗納法。俳句則奉晉子體格。入其角堂門。後麓晉子別號螺舎。家素富。風流瀟灑。所藏古器物。皆希珍也。云。以明治丁丑十二月二十一日。享年五十六。歿。葬于山谷廣徳寺。三世螺舎孝節。茲建小碑。以表欽慕之意。

右は向島百花園にある碑の文なり。数年お大槻先生園内の碑を
集めて園の川あしと題せる小冊あり。其中より採りたる附刻す
其意も秀民大人の名を動かしなき石文より花さく橋木まじりし
いよ〜永く世子傳へんことをはかるなり

稱譽吟阿彌常念信士

明治十四年巳年七月十日歿行年六十六歳
芝増上寺地中天光院に葬る

雅名を田^たトと云。おれを住居田所町の故あり。トの字は真字よかけ
ごも。片假名よよむなり。本名は和田平右衛門。和田平といへば天下
に響く鰻屋なり。

角力好きよ。中々幅がき。本場所では行司溜で見物も人あり。
然る小文久の頃より。芝居好きよ成り。芝居とも替目よよは。吃
度見物す。馬十連の人々を慕ひ。みづうら負外の馬十と名のる。
明治元年の六月。五十三歳よ。薙髪し。吟阿弥と云。知る人を八百禪
寺に招き。羅漢供の饗應あり。摺物を配る。難儀を好み。俳諧を吟造と
云。ま〜藤紫仙と云。

同治元年平定、羅漢宮
まはるをくまの仲間

の二年を善

心算の門をくまの仲間
宝三井の仲間

くまのくまの親子、おむし

梅子おむし

龍茶草

くまのくまの梅の男

龍八の善

生血愛のくまのくまの

くまの善

くまのくまのくまの

釋默阿彌居士

明治二十六年一月二十二日歿年七十八歳寺ハ
淺草北清島町東門跡添地の源通寺

本姓吉村。歌舞伎狂言作者。初めは斯波晋輔。後に二代目河竹新七。俳
號其水なり。老年は古河然阿彌と云。その名は高きは世の知る所な
れば総て略す。

弘化嘉永の頃より。明治年間筆納め迄の新狂言の数は。三百種有り
とぞ。何れもしく面白き仕組よて。セリフの巧み世に勝れ。近世狂言
作者の親玉と云べし。志ありて其生貨の律義あることは。是又芝居
道の務人なり。

おのれと翁とを舊友のよしみあれど。別て我を愛しこれ。我が深物
の營業を何れとなく引立てられ。明治十四年六月狂言貳番目の名

題に。古代形新深浴衣とある。おのこの面目これに過ぎざる恩形
く忘るべくもあらず。

翁の認め文章俳句あど絶て所持せじ。ある者は子翰のみ。幸に翁
の次女島子の梅に画あるを思ひ出しぬる故。こまに彫刻し親子の
形見孝とも見て。梅のかんばしき蒸り盡させぬあやぶまね。おのの
喜壽の小冊へ加へ。又上の名題も後の咄しに種よと。勸亭流よては
こり附刻に。

香以ち人のまよふ

水仙のあやぶまねのあや

當はまよふ明は羊の内新深浴衣と故河村翁の書納る新のまよ

中(番目)の故人梅壽のけすを大五の三ら及びぬれ批の平介の書はとて又假名も
後多の(三)仲町の書第拾と評判の園の福清(聲)の借(千圓)金を其まよ
ゆま(川)が賊(ぬら)のい後千太二ツ分ひて知事本湯浴衣川(湯)浴衣二又の出入(秋)
る絡つ(藤)も古給券中(梅)の初下(水)水(流)れと人の未(紙)所(集)の(心)の(助)か(妻)の(あ)や
後(下)分(初)之(昔)や(さ)れ(き)あ(尋)徳(末)さ(る)各(本)法(徳)走(お)貫(一)甚(高)書(ま)り(門)入
る(浴)衣(を)の(決)す(一)品(と)ま(れ)も(ま)る(り)ぬ(計)買(お)母(の)面(や)書(面)を(残)と(入)水(と)女
め(と)共(お)死(お)と(百)本(板)へ(花)入(む)と(然)る(傳)を(止)めて(自)首(お)西(の)多(も)此(ゆ)へ(る)海(の)網(か)め
妻(も)終(り)親(を)中(再)小(廻)大(山)終(板)に(三)納(り)迄(要)扶(掛)は(入)後(後)當(常)流(行)の(女)仙(物)

こびらかひあやぶまねのあや

宛永年関元祖園崎助六號助亭の書始
本羊迄百廿百羊相傳く石未葉
二世石井(二)禮書



馬十ヶ條

馬十連花之條

一 南中者才一家内むつ
 ま〜常習し平常
 口舌るま〜し治る者
 女房を始下め治る玉〜安

聊をすゝみあはれ其く之
其流中のきりりたる心哉可
為事用事——

一喧嘩口論下手理窟長流溪
於て羽葉テるまゝ一切無用中
一大觀く水吞りたる追つ所必

こゝに有る者存云ハ女名花葉
は對し少く振りしはまゝに
しる相守ふ事毎二以事——
一食物と云ハ右江の鱈は川の魚
鼈すまの何處も味くとも
忽余の目を抛眼を抬頭を

あし調ふはしし恰鐵鬼の
天をさるもしりかへし言出たし
く食ひ中間浦のあ又時
小の首陽の蕨佐野の棠飯
等々麻倉多うもとほふ焼境
よの外見は心はあふ美食

おもふしり体はリハを中改め
調ふきくつを未練の体改し
中も〜〜〜事

一於席と投尻相信り中場を
え言風下と廻りて中候
五奇毎ふすし置又扱を立

きん志まぬ類をニヤアくと
波舟外より颯出さしりにおおそ
ハ袋押キハおこるひ千と勿論
念々の河ハ替めお真踵マシ
後門シ置ハけゆるきし
中一河海ハ

一ツ物競の巾長短大小形子の
善悪格あつて高下ハし
天然く得ハ失ハり方ハ形ち見
下——ヤハらる事

一集會く第不急ハ勿論刻
限ハ止ハ滞ハせし格ハ無ハ中心ハを

其時之流之金印持事可有之
五斗之金之紫公事用換其情
より追返し申人且其苦く用
金銀五分之物より兩大観
二分五副観下より猿島を
水石共七人別多け二十を申

聊矣乱ましく方海より

但志申ハミヨリ侍りてあまのウキ、
婦人召事ハ者ハ布り刻くらひの
ふと意をまよるか——三十一

一尚志申之者古矣形の顔色

其も甚ん苦事ハ人方髪目代
分海越しより磨石入る内容候

為後ひに見石を垢たなく心裁
一平人ゆ候中、わすしハ交紋うき
言せ眉をいそはえ顔もく人を
見解をいふしし、家しより夫
形、聲が發し聊うとも通
くめし、亦知振おし、成おちる

く、素斗をヒラたふこのは、ひ
一當陣中より、取うつ切まし、わが
おとふ、おとし、もあ、一妻女の
おの、石仕く、わ女を、た、意、路、の
中、し、お、ひ、有、く、し、分、限、お、意
し、早、未、一、流、振、お、ひ、人、お、文

隠一玉取。乃悉歎人帝莫
其の過料を立二千八百相拒
りおちるまの二月中言家内記
入し高き人に罵と有合の衣類
調及満合をさるありはま丸
上げ見倒やふ夢拂其以心
意

婦より人雜費あ縮中より
一毎枝第合中より後進あり
台り中より者よりより為是
洗金分法より進一三枚文書

但何格じちる事言有る日
ともか意し後ハ用抄廿
事

古之修^く堅相守不寄
何事^事尾^尾之^之は^はより^{より}ん^ん約束
等^等皆^皆く^く致^致中^中方^方を^を惟
仍^仍く^く一同^{一同}志^志斗^斗如^如件

ふ永^永五^五子^子天^天初^初冬^冬仲^仲の^の日^日

凸大觀 真乞婦
長入觀 春乞婦
宿大觀 團栗
副尖觀 烏持
副坊觀 賢捧
團子樓 増良
於津武 凹齊

水吞官 老夫
 同 綾卜
 同 折番
 同 的驢
 同 鷓鴣
 同 波化
 同 竺仙

性免也美富也者んきいごふ
 きとる海つゝ小云 中言
 孝老婦う時後より 程家つえ
 きさけせり〜 刀取のゆは
 米お湯油のさる下後事りうけ
 きのめい〜はる〜 禁お
 思病いのみ禁句う〜を泣ッはら
 ち〜と〜のり出ふあふ
 すき〜やと〜の茶之世勢古を揚
 う揚と〜の〜 穴ま〜す

仲間へお返し〜り〜せむせむ
遊女通ひの結縁けいせいの
妻も〜りおそいさまの大あ〜せ
〜りおそい〜り高きお〜りよ
〜り急な源をけい〜り山う〜り三味
〜りん〜り〜りお〜り〜り〜り
不〜りな法を〜り神子持お〜り
お〜り〜り〜り〜り〜り〜り

一音あ〜り〜り

〜り〜り大馬十の房を〜り〜り
お〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り

捉書はある金印は是なり
但し攝る金箔を置きたるなり



大如圖
厚三分半

凸大觀真乞婦

前記是佛大人あり。佗名英甫。馬十連。よて凸大觀と云。其子細ハ頼上
に少シ瘤あり。丈短とあらむ。餘り脈も一き處などへハ出るこゝに
嫌ふ。故に之を出さず。以と云ひ一にぞ。瘤のでくに通ふを幸ひよ。凸
大觀と云。真乞婦も其瘤の事なり。

牡丹の四山の狐心經の巻六

大日本海老志記述とすの

梅香してすけり柿の
を木に

坐忘の法を云ふ

玉の玉まりの形に似たり

白濁三昧の云々

海よりおぼろの如く

月影の如く悟を外し居る

の如く

子悦ぶる如くわが心居る

一ふくま

山徑の春を云ふ

長大觀背乞婦

同上片岡秀民大人なり。馬十連にて長大觀と云。其禪の面體おも長
なるに因てなり。脊乞婦とい脊に瘤ある故あり。是ハ真乞婦に對
て脊乞婦と云あり。

卯山觀の如く

名流の如く自ら云ふ

真三升

の如く行ふ

梅香印古

葉のうらみはさかすまのうらみ

常河菰野

いづれもいづれもいづれもいづれも

さかすま

川さかすまのうらみ

いづれも

飯たてしつら

浄延信士 宿大観團栗

安政元年八月六日没年三十二歳
大阪の一心寺に葬る

本姓の堀越。八代目市川團十郎の事なり。俳名三升。馬十連よて宿大
観と云事よ付話あり。三升子馬十連へ加入致夜と。兩大観へ申込む
と。お大観承知して。さらば何大観と仕たり宜からうと云。三升子云
大観と申して。皆々様へ失禮なれども。宿大観よて御勘辨下され
たしと。其譯の私の遊びままに。場所柄よ因りて。出来蓋儀へども。
品川新宿千住など。お宿場へ参りお遊ば。大幅を致し。天下に人なき
如く遊びを致しおから。斯く名付たく存じおと云。お大観始め連中
一同最も承知いたし。當人も大喜びよて。大観の席に着く事といな
りたり。

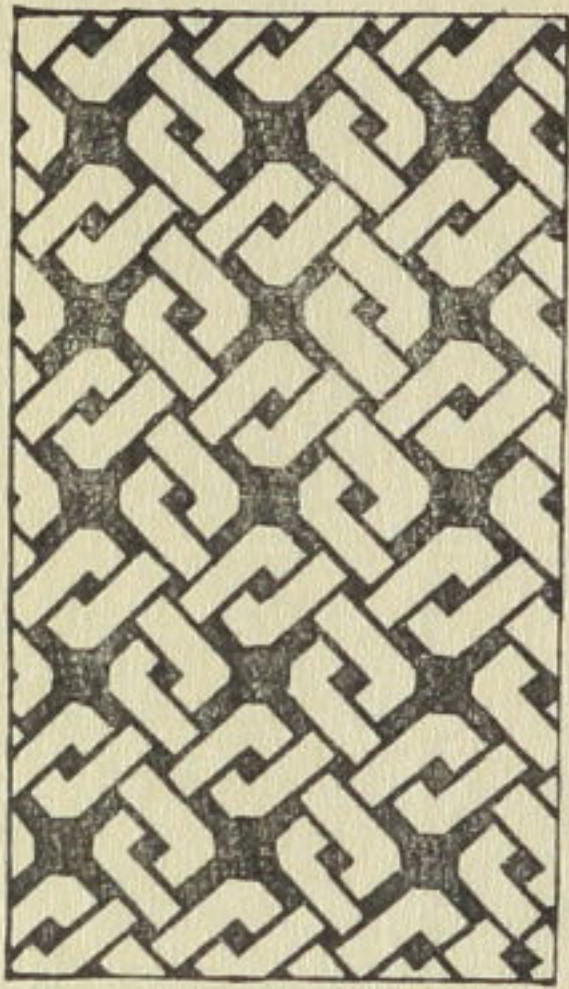
爰に一の話あり。小塚原若松屋と云家に。おでんと云女郎あり。三升子之を相方とて遊ぶ事あり。兩三度行けども。いつも一ねさせぬ故。女郎こそを氣にして。三升の男衆にて寅と云ふ若く教む。何り思召よかなむぬ事がなかり知れぬが。どうぞ一晩でも宜しき故と。祝方さんにさう申てとまると云。寅それ由を話すと。三升子云。おれは日本市川團十郎だ。小塚原の女郎と寐と云まればちやア。野暮に云へば。家の瑕瑾ど。そんな事な云ふら。まう此家へい來ぬと云ふ。寅この事を女郎に吐きと。おでん大に驚き。まゝ大變と。御願ひ申した事いせうでもよいらう。是迄の通りに御出下さる様に。直籠をして下さると云。三升子おれを聞て感心なぬと。まてい二枚給でも拵へてやらうとて。衣物を送り遣たりと。

此事に付。又一話あり。一日日れら仲の町に長大觀と。兩人にて芝居見物に行く。三升子喜び能く直せ下されと。幸ひ昨日小塚の女が若物を遣と禮よ。直蒲團をよこしました。どうぞ教き初をして下さると云。長大觀云。折角當公へ送て來と物だから。當公が教初を仕あうちやア。婦人が不承知だらうと。言ひ捨て、機教へかへると。まぐ何とより。寅が直蒲團を拵て來る。故に長大觀この禮に三階へ蕎麥を遣らうと云。日れらもまゝ好き思付と云て。そば數二百申付ると。長大觀がイヤ待ちねへ〜。川柳に流まづいと繩を樂屋でたどり返るといふから。舞臺へさしらだらうかと云ふ。日れら曰く。何よ〜こちらいどこまでも。教初へ引つけて仕舞ふら。拵ひませぬとて。まよて事満たる事あり。

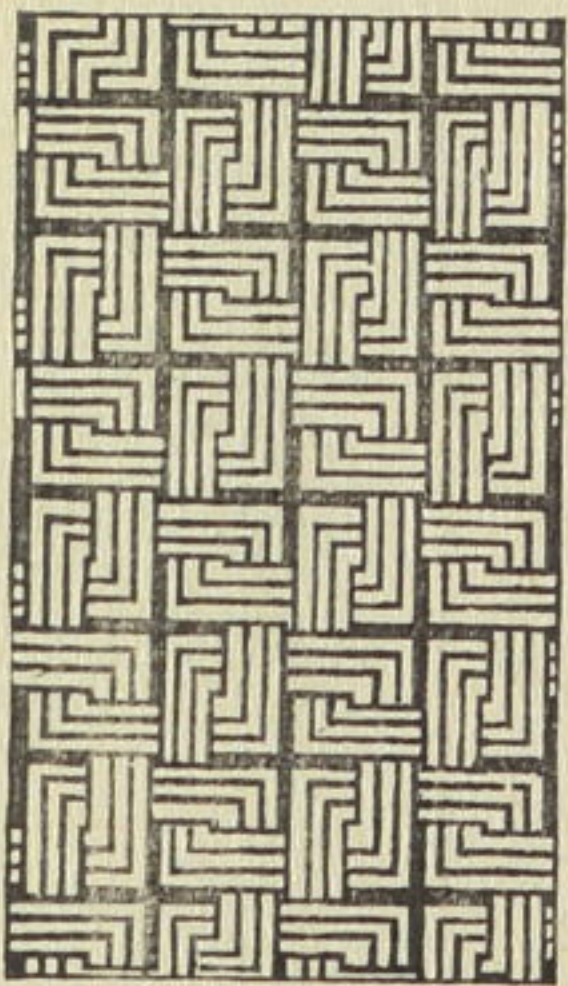
三子連書共扇

ありしとては、
 海老蔵

又一活あり。或幫間が大丸廻り若小六弥右様子の浴衣地を一反持て来て呉ると頼む。翌日持て来ると。其幫間が六んふ火消し屋敷の蒼の若仕法被見る板お物が何ふなる物なり。是の三様の組合せて有のと。へいあれハ八代目の六弥右様子でおざり様と。翌日三様の六弥右様子の浴衣地を持て来るといふ嘘です。八代目の人氣は是で所察しあるべし。七代目の好んだ形も人のみんな八代目の思ひ付の板と思つて居候。そ頃の三様六弥右様子の所居縮緬を八代目織と唱へまゝた



忠度の打ち
 向ふ六弥右
 素把の形



七代目が六弥
 右を勤めし時
 の素把の形

附言。三外子の親孝行も。御上より御褒美を戴きたる徳人なり。されど今日の其事を知らぬ人も多かりんと思ひ。御申渡の文をたよ戴せ。尚も其美德を後の世に傳へんと欲するなり。其文の首に父海老蔵御仕置云々と有り。因て見合せのため其御仕置の申渡書も載せらるゝす。

深川島田町熊蔵地借

十兵衛方同居同人父

歌舞妓役者

海老蔵

寅五十二歳

天保十三年六月廿六日申渡

其方儀。家作の儀を長押塗櫃等不相成。雖并道具と義ハ結搦よ致間教旨。前より町觸も有る事。其方家業體之儀を時の風

俗に随ひ。専ら表向を飾り不申ひては。是負も薄く。道具數も右
に准ト。金高之品も多し。却て融通も不宣候邊。右町觸を
背き居宅長押造り塗櫃も致し。赤銅斜子之釘隠を打附。庭向え
は御影石燈籠を外大石數多差置。又も同所土藏之内へ不動の
像を安置。莊嚴向総金箔彫物多し。法華壇朱塗彫物。金泥之合天
井に致し。或ハ小單首へ赤銅斜子に金之丸柄之紋を付け。小栢
等も全物に致し。其外手を込め候全物。唐櫃并に款之款に相
用。奈良細工木彫彩色之雛等。返之買取。右雛道具も島柄にて全
砂子を差き。胡粉紺青にて瓢箪菊柄五三之相之紋形を差き。右
前不知町人より貰受付邊。右雛壇へ握之雛を致し。庭敷内へ相
飾り。其上狂言小用品之義も。一ト通りにては見物人の氣に

入冨敷と存。革装具是一領。并鉄にて冨敷之具是一領。何れも武
用之品を所持致し。狂言も相用。且又先代より持傳へ付邊。珊瑚
珠之根付緒へ附候高蔭繪之印籠等。狂言之節相用。又ハ銀盃垢
之千口リ等所持致し。金子に差支。右之内千口リを所持致し。
其解之品ハ質入。或ハ可賣拂と願置。金子借受候後。去ル丑十月
質素儉約之義被仰出候も付。不相濟候義と後悔致し。居宅向造
作等取崩候場所存之付共。右躰身分をも不願棄修借上之至。
殊に先年より買置付邊。高廿五丈七尺之石燈籠一對。深川永代
寺境内に於て。開帳有之候不動へ奉納可致し。高價之品右境内
へ差置候限。不届も付。觸に背き品之并居宅取崩候本品共取上
け。江戸十里四方迄放申付る。

猿若町一丁目専助地借

歌舞妓役者

弘化二年五月七日申渡

園十郎

已二十一歳

其方義。幼年より柔和にて父母之心に背小事なく。藝道を心掛
け。去ル寅年父海老蔵事御仕置に相成。其方若年故。父よりは給
合も相劣り。其上借財多て難治之暮方より有之小處。給合等
受取小度毎。初穂と辨け除け置。其頃海老蔵住居致居候下総
國幡谷村へ相送り。同人大坂表へ致旅行小節也。路用を外厚く
手當致し。以後も書状を以て。繁々機嫌を聞き。返書之趣を委細
に母をみ小申関。安心為致。同年八月同人病氣之砌より。水を何
び成田山不動へ平癒之祈願致し。薬を煎り食事振等々。自身取

扱。看病も行届。其後歌舞妓役者共。一統猿若町へ引移小付。其
方義も當時之住居人狂越。弥以蓆衣蓆食を心掛け候小付。不勝
手之様子。母の心配を厭ひ。法事賃素小致小故。困窮より無之趣
に申成置。朝夕食物衣類等も。不自由に無之様に心を用ひ。其居
興行中も。狂言之幕合有之候時ハ。宅へ立歸り。母の機嫌を聞き
妹もを身躬之助共相應に身分は付致遣し。幼年之身孝義をい
たり。養育致し。好みつせも睦教を小致置。且又父之弟子團兵
衛ハ。七十歳に相成。養ふ者無之候小付引取置。病中より死後小
至る迄。厚く世話致遣し。其方事年頃にも相成候間。妻を迎小様
申勸め候者も有之候得共。自然母之氣も不入候節ハ。心遣之趣
に相断り。其上四ヶ年程以前より。毎朝精進茶断りて。成田山新

勝寺旅宿と不動へ日参致し。父と身分無事にて歸府を祈り。母
と心を慰め。右膝孝養を盡し。兄弟等と世話も行届候殿。奇特
と義と付。為褒美鳥目十貫文取らせ遣す。

これ後四年嘉永二年の十二月海老苑所赦免あつて江戸に
かへる又五年まぎ安政元年の八月三外子の父と誘れ大坂
又往き自害

親しむゆゑに是來りし

月を仰上より察せたりし

あまうし〜

も

八月二日

杖のちのり

天樂院安譽暢音宗阿菴主

安政元甲寅年十一月三日没行年
三十二歳淺草山谷の廣徳寺葬る

副大觀鳥狩。本名今井安右衛門と云。赤坂今井谷に住して。名主役を
勤む。後辞して新吉原角町へ移り。質屋を營んで大黒屋と云。鳥狩と
いふ名は。鼻の先き尖りし様不見ゆる故に。綽號といひ此人は秀民大
人の異腹の弟此由。氣軽よて至て面白き人物。能狂言を好む。催しを
して上より御咎を蒙りたる事あり。茶事の雲州流なり。俳諧叢句等
の事い。我等存せむ。種々物語もあまうしと略す。

あまうし〜

馬十連春興扇面白不覺

法性院自然日慧信士

明治八乙亥年七月二十八日没行年卅八歲
南豊島郡柏木村百拾番地常圓寺葬る

馬十連にて。副坊觀賢^{けんがう}棒。嘉井田氏あり。菓子渡せにて。本郷伊豆倉横
所に住す。松平加賀守様へ御金御用達をまゐる家なり。本家の婿婿相
續し。自身は分家して。質渡世を始め。同所あふらげ横所に住居す。
其時古仕ふ番頼に。小三郎といふ者ありしが。寫本の赤穂記でも讀
みし事と見え。義士等が赤穂の舊君を亡^{はうくん}君と云ひしを覺へてより。
主人の事いそ君と云ふことに心得。おのが主人仕事に亡^{はうくん}君と云。
今日の君いそ君の御留守など。出入の者や小僧にいひきりせし由。此
事の我等の舅が此店に小僧を勧めたる者より。弟にきりたりと。高
人の番頼などい。多し。此様なる人何るなり。ま放にこの賢棒君の

倅名を文字を變じて坊業とも略して御坊とも云。
倅君後に災店を廢業して。神竅方御用達とあり。免倉治兵衛と云。馬
十連の賢倅也。六の神竅方の唱へを借りて。前の坊業よきかせり。か
り。慶應戊辰變革之際。横濱へ移り。海田と改む。其後南豊鴻那鳴子町
へ移居す。種々の劇阿れど略す。

目下は氣楽してハナハナ
笑ふ也

馬十連喜無扇面勺ふ覚

釋 桑阿信士

明治十二年己卯八月七日歿行年六十六歳
山の手大久保板ヶ嶽天專福寺に葬る

高木依平。家稱小倉屋。駒込千駄木町園子坂の上に住す。馬十連にて。
園子樓増良と云。其譯は友人澤名して阿猿あざると云へばあり。其は能く
人の知る所にて。深川磐昌の頃よりの道樂者あり。京橋南傳馬町の
産れし也。幼より世事に才有り。壯年に至り。小倉庄助といふ諸藩御
金御用達の手代を勤め。後に園子坂へ移り。後補を閉く。俳名をひさ
おと云。まゝ桑阿とも。本姓は遠山とて。待人雲如先生の弟あり。

大目海光の御孫

江戸の水祇舟の歌

寶三升

枕竹人々リく成の果枝

梅香幽玄

あさたの流及新 花の中

羅漢會

乙酉の流及新 花の中

あさた

乙酉の流及新 花の中

あさた

あさたの流及新 花の中

あさた

あさたの流及新 花の中

あさたの流及新 花の中

あさたの流及新 花の中

あさたの流及新 花の中

あさたの流及新 花の中

あさたの流及新 花の中

馬十連春興扇面白不覺

白池院鷺阿彌壽星居士

慶應元乙丑年十月二十音歿行年五十一歳
駒込富士前町大運寺に葬る

鷺傳右衛門。後に寛右郎と改む。徳川家御能狂言師あり。馬十連にて
於津武^{おつむ}凹齋^{こさい}と云。凹齋とい歌に^{おと}みたる所ある故に名と^は。美^い
き男振りよて。藝道ハ上手の聞え有り。
中々能道楽者にて。吾亦不遊び中万字のおいらんに。鷺の飛びし浴
衣を。深めて迷りたるに付き。悪摺^{あくまじり}あどでき。そ外いろく面白き話
し何れと眩す。

馬十連壽星

鷺に所々や那の枝の菊が別

静心院圓山道榮居士

安政五戊午年二月二十三日歿行年六十八歳
淺草清島町常林寺に葬る

淺草材木町に住して。名主役を勤むる勝田權左衛門あり。一中節の
淨瑠璃を好て。そ道よ委しく。隠居して後。都一閑斎といひしが。故あ
りて嘉永二年より宇治紫文齋と改む。新曲數十段を作りて。一派を
弘めたり。

元來歌道を好み。藤原春世と云。まこと狂歌をよみ。千種庵法持と云。馬
十連よて水呑官老夫と云は。おいそれ者と云へる心なりとぞ。和歌
と狂歌と一首づゝ覚えたれば書きつく。

馬十連喜無扇面句不覚

松竹堂文

神子の言は港のまゝあや
女の心ちうせゝ宗寺
けしーの松ぶるあし
つゝあし派のしーあし

松仙古朴信士

明治十二年卯年八月十二日歿行年六十九歳
深川法乘院に葬る依り圖齋堂と云ふ寺

馬十連にて水呑官^{あやしめ}後々通稱大津屋忠右衛門と云。初ハ深川^{あやしめ}古石坊
の遊女屋ありしが。天保度此所趣きて。新吉原町へ移住し。後僞人
となり。永機宗匠の門に入り。世中庵古朴と云。此人は悪仙人と仇名
して。種々奇談もあれど略す。後々の名は。目が小さく見當違ひあるが
なり。

世中庵古朴

あやしめ

目が小さく見當違ひあるがなり

正覺院

梅子如雪

梅子如雪

身も又しおぼえさるるあり

正覺院

梅もまたおぼえさるるあり

正覺院

梅子の如き心

馬十連春興扇面句不覺

正覺院法廣信士

文久元年酉年六月十六日歿行年未詳
本所表町奉久寺に葬る

武田左虎右衛門馬十連にて。水呑官抄番せうばんと云。もと本挽町の芝居茶
屋守田左の養子なり。猿若町へ移りて。武田左と改む。上にも出でし
大治馬平よて。後よ七代目の門弟とありて。市川馬平と云。此人能く
密の氣を取ること衆人よ勝れ。話の面白き男よて。當時通り者がる
人よは。この武田左へ出入らざるを肩身せまよとしたり。其上河原
崎屋の奥役を勤め。廣く世間に名を知られたり。

白石齋の狂言に。観音真山の場よて。キザ通人をして評判屋へいばんかり
しが。元来役者い下手なり。折番の名い。いつも中間と町内番人の役
を勤るに。當人をいやがらせよ折番せうばんといふ。

都千中馬十連の傳書附

馬十連喜與扇面句ふ覚

釋乘華信士

慶應元乙丑年六月二十一日歿行年五十四歲
築地西本願寺地中妙覺寺に葬る

都千中馬十連（せんちゆう）は水呑官的驢（てきろ）本姓吉田氏なり。信州の産にて。若き
より江戸に来る。日本橋辺の左官棟梁に人柄吉兵衛といふ者あり。
其娘に思つられ。婿養子とある。俗名六三郎なれば。人何とあして左
官六（かろく）と呼ぶ。或時友だちが路（みち）にて。仕事場へ行くと行逢ひ。左官六さ
ん鉢巻（はちまき）の御普請（ごふしん）かと云ひしが。河東節流行の時代なれば。おの語路（ごろ）
滅法もてはやりたることや今に覚居たり。

其後養家が出で。深川の羽織衆を畫とす。吉原の幫間とあり。荻江露
助と云。後まゝ吉原を退いて。一中節の大まとなり。都千中と改む。初
め南國矢之倉に住み。まれより玄鉢店（げんぱだん）に移りたまはば。玄鉢店の師匠

と皆とくを呼ぶ。美音よと唄淨瑠璃とも器用にうたひ。其上見識
高くとまりたる男なれば。通常其密は少く。具負よされ一方は十
人衆。法大名御金所用達。藏前の札差。金浪座の役人衆など。應々の密
筋にて。今日で云ふ紳士連をのりなま。故に世間よとも上と能大太
鼓と云。

又本店とも唱へたるに活あり。弟子に有中といふ者あり。元来更紗
職人にて。名を瀧といふ。法藝に器用なれば。更瀧と名乗り。天物連に
て寄席へも出たり。中と能利口者。後に千中の門に入り。吉原の幫間
となる。此男師匠を氣どまて。權威もまゝ。中以下に具負の密多し。
さきば有中の師匠の事を常に本店と呼ぶ。いつか密筋も本店の
名を呼び。その方が通用よくなり。男藝者は吉原が本場なるに。他の幫

間達も。本店とこと能と叫びたり。千中が其時まさまとまきみ様を知
るべし。併し馬十の的驢の名へ。何故を知らん。慶應元年の夏。佐羽さ
んの御招よて。一中節の門弟共を連れ。上州相生へ往き。其地に山二
といふ第一番の料理屋へ泊り居る中。卒中風よて死したり。

とやの海老か止る

弄し岩えんらわ間様

馬十連春興扇面句不覺

泰應院英徳信士

安政二乙卯年九月十七日歿行年未詳
菩提所ハ下総田子の由

田子七。馬十連にて水吞官鷓毛トヤモと云。下総田子の産にて。本ハ船歌な
り。後ハ新吉原の幫間とありて。田子七平と云。其後同所京町へ
藤屋といふ鰻屋を開業す。平生よもをかきあつて。幫間中の唯一
といえる。船歌よみ御座敷の取持が出来る位ゆゑ。万事御察し何る
べし。鷓毛の名その由来を不知。

君と舟長持とるりつゝ

馬十連喜無扇面匂ふ覚

櫻永院善孝日幹信士

明治七甲戌年十一月廿殺行年六十六歳
寺ハ淺草松葉町妙音寺ナレドモ朱引内
埋葬不相成時ナレバ谷中三崎町妙法寺に
葬ル七浦善神の在ル寺ナリ

櫻川善孝。馬十連にて。水呑官波化^{たけ}。深川仲町の産なり。初代櫻川善孝
は石川善之助。その男にて。初名由次郎と云。天保御趣意の時新吉原
へ轉じ。父の名を継ぎ二代目櫻川善孝と云。幫間中法大名物なり。
或年日暮ら方へ送りあせし掛乞ひ言譯け手紙ありその文

まこやに大由善妙法にあり一願上候に存一の世話場にて志ん
わうま役より中候にまつりし善孝は是程にありつり願上の
いざはせ渡りの善孝と云覚悟たのみ入の先まをまかけたりと能
かこくぐさうばはるる二番目といふそぎめをなむし

梅宗一けしむる吉原系

仙之物語

卯山瓶

何物も持てわらぬ

室三升

けしきのまゝのりまの壺の梅

梅も雪も

余の心もけしきの花の道

自ら思ふ事

かゝるの花をよめる物知らば

馬十連春興扇面句不覺

金照院壽僊素行竺阿彌

文政六癸未年十月二日生幼年己亥七十七歳
墓は谷中墓地御隠殿の坂の中途西側あり
石面の梵字は高野山快極大僧正の御筆と

馬十連よ。水呑官竺仙^{ちんせん}奉名橋本仙之助。當今素行と改む。竺仙とい
身體ちんちくなる故の渾名あり。性淡虚弱あまば。年四十才の時、善
提所へ法名を授ひ。明治十一年五十六才よ。高野山へ参詣し。大師
御影供^{ごかげぐ}三月二十一日薙髪して。千蔵院院主流谷覺亮和尚より。金照
院と法號を下され候。

世に名家の名を嗣く人多く阿れど。已れいさる事を好むものふい
阿らば。竺仙の名も古人は梵竺仙阿りて。そ似寄の如くなれど。然に
は何とず。まいたくは天へ石を擲くるの道理よ。及びもあきま
あり。さやこの事の善學よ。わきまへ居たり。世の人必く古人の

名を憚からざる者と憎まるゝことなれ。

ア、馬十の連中の残りだあれ世の人となり。娑婆に居るは我等一人。今日の世に中ハアキハのみ多く。馬十の昔なつかしさに。余ごら心ふ覚えたる事共を。廻らぬ孝と書き留め置くなり。あは生残りたる我等なれば。香花にかへん手向あり。さきど草葉の蔭の人とは。然もアキハは成つたと云ひもやせんら。何あかし。

卯の歌

卯の歌 花は山に春は雪の心

建三郎

花は山に春は雪の心

梅雪の歌

梅雪の歌 梅の花は雪の心

五律の人の我をさるる物にあり

梅雪の歌 梅の花は雪の心

五律の人の我をさるる物にあり

梅雪の歌 梅の花は雪の心

五律の人の我をさるる物にあり

梅雪の歌 梅の花は雪の心

